Con Alma
コン・アルマ
Chano Dominguez Trio
チャノ・ドミンゲス・トリオ

1. ラ・タララ
La Tarara 《 Trad 》(4 : 44)
2. 何も言わないで
No Me Platiques Mas 《 V. Garrido 》(5 : 59)
3. ハウ・アバウト・ユー
How About You? 《 B. Lane 》(5 : 22)
4. ドルフィン・ダンス
Dolphin Dance 《 H. Hancock 》(5 : 46)
5. コン・アルマ
Con Alma 《 D. Gillespie 》(5 : 30)
6. 牛と月
El Toro Y La Luna 《 A. Sarmiento, C. Castellano 》(7 : 45)
7. イット・クッド・ハプン・トゥ・ユー
It Could Happen To You 《 J. Van Heusen 》(7 : 20)
8. ハロー・ボリナス
Hullo Bolinas 《 S. Swallow 》(7 : 38)
9. 約束
Jure 《 R. Pasos 》(7 : 14)
10. スピーク・ロウ
Speak Low 《 K. Well 》(6 : 18)
11. ダーン・ザット・ドリーム
Darn That Dream 《 J. Van Heusen 》(5 : 59)

チャノ・ドミンゲス Chano Dominguez 《 piano 》
ジョージ・ムラツ George Mraz 《 bass 》
ジェフ・バラード Jeff Ballard 《 drums 》

録音 ： 2003年8月28日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク

Ⓟ Ⓒ 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*
Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio in New York on August 28 , 2003.
Engineered by James Faber. Assistant : Peter Doris.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by
Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover : ©Irina Ionesco / G. I. P. Tokyo.
Artist Photos : John Abbott. Designed by Taz.

よほど熱心なピアノ・ファンもしくはラテン・ミュージック愛好家でない限り、本作の主人公チャノ・ドミンゲスの名を知る人は少ないのではないか。僕も知らなかった。いや、正確にはマイケル・ブレッカーが参加したフラメンコ・ジャズ・プロジェクト『ジャズパナII』や、ラテン・ジャズのドキュメンタリー・フィルム『Calle54（カジェ・フィフティーフォー）』といった作品を通じて、その音には接していたはずなのだが、名前を記憶するには至らなかったのである。

というわけで、この新作ではじめて彼の音楽に触れるファンも多いと思うので、まずはそのプロフィールからご紹介したい。

チャノ・ドミンゲスは1960年、スペインのカディスに生まれた。8歳の時に両親から贈られたギターが最初に接した楽器で、フラメンコ愛好家であった父の影響もあり、独学でフラメンコ・ギターを学んだという。しかし12歳の時、教会のパイプ・オルガンに触れて以来鍵盤楽器に興味を持つようになり、ピアノに転向。18歳でプログレッシブ・ロック・グループ「CAI（カイ）」を結成し、3枚のアルバムをリリースし、欧州ロック・シーンで高い評価を得た。

1980年代前半にCAIを解散してからは急速にジャズに接近し、92年に結成したトリオでは「ジャズとフラメンコの融合」というライフ・ワークに着手。以後パコ・デ・ルシア、ゴンサロ・ルバルカバ、ティト・プエンテ、パキート・デ・リベラ、ガトー・バルビエリ等々と共演。一方で、我が国を代表する尺八奏者、山本邦山とコラボレートするなど、ジャンルを越えた活動を展開している。

以上のようなプロフィールから想像されるのは、どっぷりとアメリカ発信のジャズにつかるのではなく、自国の伝統音楽をジャズの方法論で表現しようとするミュージシャンの姿であろう。念のため彼のリーダー作を何枚か手に入れて確かめてみたのだが、そこで繰り広げられているのはまさにラテン・ヨーロッパ的な、熱狂のリズムと哀切のメロディー、そして陰影に富んだリリシズムがないまぜになった独特の世界だった。

ところが…!

僕は本当に不思議に思うのだが、ヴィーナス・レーベルに録音するミュージシャンは、どうしてこうも“ジャズ”を演奏してしまうのだろう。もちろんレーベルには、それぞれのカラーというものがあって当然なのだが、それは多くの場合、プロデューサーなりオーナーなりが、自分の好みのミュージシャンばかりを起用し、音楽のコンセプトまでをも操作した結果生まれてくるものだろう。

ところがヴィーナスは違う。ご存知のようにこのレーベルには、ビバップからフュージョンまで、非常に多岐にわたるタイプ、世代のミュージシャンが録音を残しているのだが、様々なスタイルを持ったその誰もが、しかしここにやってくると、なぜか“ジャズ”を演奏してしまうのだ。プロデューサーの強権発動？ いや、そうではあるまい。僕の知っているヴィーナスのプロデューサー氏は、音楽についてミュージシャンに強要するようなタイプの人ではない。よしんば「一つ、ガッツのあるストレートなジャズを頼みますよ」ぐらいのことは言ったとしても、ミュージシャンが同意していなければ、そういう音楽が出てくることは絶対にないはずだ。

だがヴィーナスではそうなる。なぜだろう。これはあくまでも想像だが、制作側が演奏の細かい内容まで強要しない、ある意味ミュージシャン任せのリラックスした環境が、彼らにそういう音楽をさせるのではないか。ということは、ジャズ・ミュージシャンの心の深層にはやはり「ストレートなジャズを思い切り演奏したい」という欲求があるということだろうか。それともプロデューサー氏は、巧妙にミュージシャンを自分のペースに巻き込んでいく術を心得ているのだろうか。

このドミンゲスの新作も例外ではない。もしこの作品だけを聴いていたら僕は彼のことを、「ちょっとラテン・テイストは入っているけれど、わりとオーソドックスなピアニストだな」と考えていただろう。けれど、以前の作品を聴いたあとでこれを聴くと、その変貌ぶり、そしてヴィーナスというレーベルがミュージシャンに及ぼす影響力の強さに、驚かされずにはいられなくなるのだ。ちょうど、耽美派ピアニストと思われていたスティーブ・キューンが、強力にドライブする演奏でヴィーナスからデビューし、我々をびっくりさせた時のように。

聴いておわかりのように、ここでのドミンゲスは、基本的には4ビートの、それもあまり凝った仕掛けのないジャズを演奏している。取り上げられている曲も、スタンダードやジャズマン・オリジナルが約半分。それだけ取ってみると、現代にあってはとりたてて特徴のないピアノ・トリオ・アルバムに見えるかもしれない。にもかかわらず僕がこの作品に強く惹かれるのは、ドミンゲスの演奏が、本当に心の内から生まれた自然さ、そしてそれゆえの強さを有しているからだ。

これは、彼のピアノ・スタイルが誰にも似ていないまったく独創的なものだというのとは、ちょっと違う。誰かからの影響が直接的にあらわれているわけではないけれど、しかしそれでもこの人のピアノから、モダン・ピアノの巨人であるバド・パウエルやビル・エバンスを土台に、チック・コリアやキース・ジャレットの匂いを嗅ぎ取ることは、そうむずかしいことではないだろう。

しかしジャズの価値、音楽の価値は、実はそういうこととはあまり関係ないのだ。たとえ誰かのスタイルにそっくりであったとしても、その演奏が真に内なる欲求から生まれたものであれば、それは絶対に聴き手の心に届くはずなのである。そういう音楽に出会う機会が少ないのは、いかに今の世の中に、内発的ではない、表面的な形だけにとらわれた演奏が氾濫しているかということの証左ではあるまいか。

ドミンゲスのピアノ・スタイルそれ自体は、けっして鬼面人を驚かせるようなものではないが、しかしその音楽には彼だけの“歌”が――幼い頃から親しんだフラメンコの情熱的な、そしてロック・バンドを経由したジャズ活動の中で手に入れたコンテンポラリーな“歌”が、あふれている。その歌は、時に饒舌に過ぎたり、あるいは時に甘すぎたりと、けっして完全無欠なものではない。しかし完全無欠でないのは、逆に考えると、彼の表現欲求が「ジャズの形」に収まりきらないからでもあるのだ。そして僕は、ジャズの形に収まりきらないその「はみ出した部分」にこそ、ドミンゲスがオーソドックスなトリオ・フォーマットでこれを録音した意味があると考える。誰もが理解できる平易な音を使っているにもかかわらず、けっして平凡には陥らない音楽。こういうジャズができる人が、まだ世界にはいるのだ。

●曲と演奏

■ラ・タララ

哀愁に満ちた旋律が印象的なスペインの古謡で、ワールド・ミュージック系のミュージシャンがしばしば取り上げている。原旋律の美しさを活かしながらもパワフルにスイングする演奏が、実にエキサイティングだ。

■何も言わないで

1954年に大ヒットしたラテン・ポップスのスタンダード。近年ではルイス・ミゲルの歌唱が記憶に新しい。ボレロっぽいリズムにのせた甘やかな演奏は、まさにラテン・バラードの粋と言えるだろう。

■ハウ・アバウト・ユー

映画「ベイブス・オン・ブロードウェイ」でジュディ・ガーランドが歌ってヒットさせたナンバー。何の仕掛けもないトリオ演奏だが、それでこれだけ聴かせてしまうドミンゲスの力量は、やはり尋常ではない。

■ドルフィン・ダンス

あまりにも有名なハービー・ハンコックのオリジナルで、取り上げているピアニストも多い。ドミンゲスのプレイはけっして派手ではないけれど、「歌とモードの融合」という原曲の狙いを見事に衝いている。

■コン・アルマ

ラテン・ジャズの立役者、ディジー・ガレスピーのペンになる名曲。哀愁に満ちた旋律と和声進行は、現代の耳で聴いても少しの古さも感じさせない。ソロ中間部の息の長いフレージングは、ちょっとキースを思い出させる。

■牛と月

97年のソロ・アルバムにも収録されていた古いフラメンコ・ナンバー。スパニッシュ・テイストのピアノ・イントロ、ワルツのリズムにのせた美旋律のテーマ、歌のたっぷりつまったベース・ソロと、聴きどころたっぷりの名演である。ピアノ・ソロの途中にあらわれる、あの旋律は…?

■イット・クッド・ハプン・トゥ・ユー

数え切れない名演が残るジミー・ヴァン・ヒューゼンのナンバー。ドミンゲスはラテン系に多いリズミック・アプローチではなく、レガートでフレーズを歌わせる行き方を取っており、その音楽性の多彩さを見せつける。

■ハロー・ボリナス

ベーシスト、スティーブ・スワロウのオリジナルで、ゲイリー・バートンやビル・エバンスも演奏している。ほとんどノン・リズムで3者が即興的に絡み合う、静謐な空間の緊張感がすごい。

■約束

ジョアン・ジルベルトの後継者と言われるバイーア出身のボサノヴァ・シンガー、ローザ・パッソスのナンバー。軽快なサンバ・ビートに乗せたプレイは、ドミンゲスの真骨頂とも言えるものだ。

■スピーク・ロウ

〈マック・ザ・ナイフ〉と並ぶクルト・ワイルの代表作。湧き水のようにフレーズを紡ぎ出してゆくドミンゲスと、それを煽りまくるバラードが、実に刺激的。

■ダーン・ザット・ドリーム

古いミュージカル「スイング・ザット・ミュージック」のために、ジミー・ヴァン・ヒューゼンが書いたナンバー。基本はバラードだが、ソロ・パートではリズミックなレスポンスが随所に聴かれる。

（1月30日　藤本史昭）